

## 大雪の冬にふと思ったこと～聖書と雪～

今年の冬は各地で大雪となっています。除雪作業は本当に体力を消耗します。私がかこれまで赴任してきた教会は雪の多い地域でした。弘前、会津若松は豪雪地帯で冬期間は除雪をしない日はないぐらいの雪が毎日降ります。会津若松では除雪が原因で腰を痛めて整形外科に通院していました。八戸、盛岡も結構な量の雪が降ります。雪は適度に降れば素敵ですが、降りすぎると生活に支障をきたします。車を運転するのとても怖いのです。一方で、子どもたちは雪遊びを満喫しています。天気は私たちにはどうすることも出来ないとはいえ、ここ数年の夏の猛暑、豪雨、台風、そして冬の豪雪による災害によって私たちの生活は絶えずおびやかされています。

祈祷書の朝の祈りに「イザヤ第2の歌」があります。(祈祷書 63 ページ)

この歌の出典は、旧約聖書イザヤ書 55 章 6 節～11 節です。その中に次のような箇所があります。「雨や雪は、天から降れば天に戻ることなく必ず地を潤し、ものを生えさせ、芽を出させ、種を蒔く者に種を、食べる者に糧を与える。そのように、私の口から出る私の言葉も空しく私のもとに戻ることはない。必ず、私の望むことをなし私が託したことを成し遂げる。」(聖書協会共同訳 イザヤ書 55 章 10～11 節)

聖書の中に「雪」という言葉が何回用いられているのか調べてみました。結果は 29 回でした。上記のイザヤ書もその一つですが、じわりと心に響いてくる箇所だと思いました。神の言葉は理解するのではなく、思い巡らせる事を大事にしたいと日々思ってい

ますが、降り続く雪は確かに天に戻ることはありません。私たちの生活に支障をもたらすほどの大雪であっても、必ず地を潤すのであるという聖書の教えに、素直に「アーメン」とはいえません。しかし、何か気になる箇所です。じわりと響いてくるのです。理解は出来ないけれど、思い巡らせるみ言葉ではないでしょうか。

さらに、「そのように私の口から出る言葉も空しく私のもとに戻ることはない。」と聖書は語ります。天使ガブリエルから主の母になることを告げられマリアが、親戚のエリサベトに挨拶に伺いました。マリアが主の母になることを戸惑いつつ、その言葉を信じて受け入れた彼女に、エリサベトが語った言葉があります。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」(ルカによる福音書 1 章 45 節)

神さまが一度口にされた言葉は必ず実現するのです。ヘブライ語で「言」はダーバールと言いますが、「出来事」という意味もあります。神の言は出来事の中に顕れるのです。

私にとって心地の良い出来事のみならず、出来る事ならば回避したい出来事の中にも神の言は宿るのです。神の言葉を戸惑い続けながらも必ず意味があるのだと信じていることが出来るようになりたいと思います。大雪の冬に日々戸惑いながらそんな事をふと考えています。(司祭 越山哲也)